

学 位 論 文 題 名

フランス現代文学と精神分析－映像と文学の関係論

学位論文内容の要旨

本論文の序論は二つのセクションによって構成されている。第一に、「文化の転換と精神分析」では、精神分析が語の狭い意味での「治療」から離れるようになったこと、それと平行して、精神分析理論の本質が、フロイトからラカンへ継承されたという本論文の立場が示される。第二に、「文化理論としての精神分析」では、「治癒」という概念の解体の過程が辿られて、ラカンの「症状」が前面に出される。以上の二つの側面から「文化」ひいては「文学」を大きな意味での「症状」として捉えるという、本論文の基本的な構えが提示される。

第一部は「理論篇」とされ、五つの章に補注を加えた構成となっている。第一章「文化理論としての精神分析」では、フロイトの中期から晩年にいたる著作に拠って、精神分析における文化との関わりが辿られ、文化理論としてのその可能性が論じられる。第二章「治癒という理想の終焉」では、本論の基本的構えに従って、主としてフランスの精神分析理論家ナタリー・ザルツマンの理論に依拠しつつ、精神分析が、エスなどの概念化を通じて一種の「生命力」の中心化を遂行し、そのため実は「治すべき」症状という発想と齟齬をきたし（いかなる「症状」も「生命力」の現れに過ぎない）、狭い意味での「治療」概念が放棄されたことを跡づけている。第三章「ヒステリー者：文化理論から文学へ」は、このような生命との関係で文化を見る時に、精神分析の常なる導きの糸が「ヒステリー者」であったことに注目している。第二部「分析編」でのヒステリー論への布石となる部分であるが、ここではフロイトの（ヒステリー的てんかんという）古典的なドストエフスキー解釈を中心にして、文化理論から更に文学理論への通路を確保する議論が示されている。このフロイトのドストエフスキー解釈を手がかりとして、次の第四章「ラカン理論の基礎と対象 a の概念」においては、図式化様式化された形でラカンの「シニフィアン」や「対象 a」といった難解な概念が説明されている。フロイト理論では文化理論までしかカバーできないというのが本論の基本的な構えであり、それを越えて映画や絵画といったイメージ、

そして文学テキストの読解を遂行するには、ラカン理論への深化が必要であることが説かれている。ここで、第一部「理論編」は、第二部への橋渡しとして、第五章「方法としての視覚芸術」とラカン理論に関する補足である「欲望に関する補注」を配置する。この部分では、初期ラカンに対するサルトルの果たした役割、その大きな影響が確認され、視覚文化を論じる際に不可欠な概念装置としての「眼差し論」が提示されるのである。

第二部「分析篇」は、以上の理論装置を踏まえて具体的な事象を分析する部分であり、実地での応用と言うべき論述となっている。ここでは、ヒッチコック、ブレッソンの映画、フランシス・ベーコンの絵画とドゥルーズ哲学におけるヒステリーの問題など、重大な諸テーマが批評的に展開されているまず、ヒッチコックの「顔」が強度的に解体され、断片としていくつもの経路を辿りながら循環していることが論じられる（第一章「ヒッチコック映画における顔と時間：映画的经验を巡って」）。次いで、ブレッソン映画における「声」が取り上げられ、これもまた断片化を蒙っていると論じられる。そして、「人間化」へと誘う罫を巧妙に回避しつつ、あくまで「装置」と対象との関係性において映画に現前するものとして、「声」という現象が詳細に論じられる（第二章「断片と声：ブレッソン映画における音の装置」）。また、フランシス・ベーコンの絵画における「肉」の存在論が展開される部分では、時間性とヒステリーの関係を通して、現在性の圧倒的な優位性のあることが論じられている。またそれを補足する部分では、「死」とドゥルーズのダイアグラム（ディアグラム）の関係が明確化されている。

結論部分は、第二部の分析を通覧して要約した上で、フロイトからラカンの精神分析理論に対する批判として知られるドゥルーズとガタリの『アンチ・オイディプス』の解説に取り組んでいる。この結論部分では、断片化したといわれる現代世界の文化的諸要素が、いかに新しい組み合わせを可能にしているか、次々と肯定的な結合がなされる可能性を秘めているかについて、「欲望」の概念を中心に述べられている。それまで結合していたものを解体し、別の何かと新しい組み合わせをつくること、これがそのまま「欲望」であり、言語活動や文化活動の根源的な姿であることが確認される。精神分析が、「治療」という概念にとらわれる限り、このような無限の活動は制限されざるを得ない。しかし、第一部で述べられたように、「治療」という概念から解放された精神分析の文化的応用においては、「欲望」は肯定されるのである。現実に関ここであるというわけにはいかないにしても、視覚映像芸術や文学の領域においては、欲望の肯定が可能であることの意義が強調されて、本論文は終結する。

学位論文審査の要旨

主査	教授	佐藤 淳二
副査	教授	応 雄
副査	教授	望月 恒子

学位論文題名

フランス現代文学と精神分析－映像と文学の関係論

平成24年12月14日に審査委員会が発足してから、5回にわたる審査委員会ならびに1回の口頭試問が実施され、審査委員会全員によって慎重に論文が審査された。

その結果、本論文の観点についてまず次のように整理された。

本論文は、フロイトとラカンの精神分析理論を文化批評の方法論として基礎づけ、そこからフランスの現代文学の分析の基本的な方法を展望するという壮大な企図のもとに執筆されている。従来、精神分析を援用した文化批判は、形式を無視した恣意的解釈という非難に曝されてきた。この批判に答えるべく、本論文は、あえて精神分析の理論に正面から取り組み、これまでの研究基盤の弱点を剔りだし、その限界を精神分析理論の内側から突破するという道を選んだのである。

いうまでもなく、精神分析は「治療」技法として誕生した。そのため、精神分析の諸概念を、「治療」以外の領域に応用することは、様々な困難を伴うことになる。本論文はまず、精神分析に関する社会通念の誤りを正すために、「治療」という言葉に含意される常識的な意味を切断することから始める。「治癒」や「治療」に関する一般的な理解から精神分析理論を切り離すことで、それを文化批評の方法論として純化できると、本論文はフロイトに遡って主張する。この目的のために、本論文では、ラカンの理論に準拠した「対象」概念を展開する。このような観点から、本論文は、精神分析理論が文化と文学の批判的研究に本格的に適用可能であると主張することになる。そこから、文学の対極にあるような映画（ヒッチコック、ブレッソン）そして絵画（フランシス・ベーコン）を読み解くこ

とで、逆に、現代の断片化した文化事象と文学そのものを対立的で否定的なネガのように浮かび上がらせるという本論文の方法論が導き出される。結論部分では、ドゥルーズとガタリの著作とりわけ『アンチ・オイディプス』の精神分析批判をも取り込むことが目論まれ、それを通じて、精神分析理論から現代フランスの文学研究に通じる新しい可能性が見出されると、本論文は結論している。以上が、本論文の観点である。

次に、本論文の研究成果について、審査委員会は次のような判断に至った。

本論文の研究成果は、精神分析理論の本格的理解に基づいて、「治療」ないし「治癒」概念から離脱した方法論を応用することで、文化の解釈が可能となると立証した点にある。ドゥルーズとガタリによる精神分析批判も、「治癒」という概念からの離脱を促すものとして、この視野に収めることができること、精神分析理論への偏見とも言うべき全否定は克服されるべきものであること、これらを映画や絵画の具体的な分析から立証した点も本論文の成果として特筆されるべきである。とりわけ、視覚的映像がもつ精神分析理論への親和性を、「鏡像」というすでに人口に膾炙したイメージに流されることなく、「対象 a」の問題として展開するところにも、本論文の理論的水準の高さが示されている。

ただし、具体的な文学作品の分析が不十分であるという点は、文学論に至る理論的な作業を終えたところですでに膨大な量になってしまったとはいえ、本論文の一つの弱みであると指摘しないわけにはいかない。そもそも、言語論や書くことそれ自体の機能についての精神分析における標準的な学説が、いまだ世界的に見ても存在しないのは、精神分析それ自体の問題なのかどうか、これも問われないうまになっている。問題点を指摘し示唆に富むものの、文学テキストの具体的な分析の議論が十分に展開されているとはいえず、審査の際にも、フェリックス・ガタリの「スキゾ分析」などを扱う直前で本論文が終わる観がある、という指摘がなされた。

とはいえ当該領域（精神分析と文学・視覚・表象文化論の領域）において、本論文が水準を超える成果を上げたことは疑う余地がない。また、精神分析と文化・文学の関係論という困難にして恐るべき課題に挑戦し、その全体像に迫るような理論的な筋道を確保したという点は高く評価されるべきであろう。指摘された諸問題点は、本論文の対象領域の広さと射程の長さによって由来するものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではないというのが、審査委員の一致した結論である。

最後に所見として、本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと認めた。